

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

128

2015. 3

PHD 運動とは 1962 年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの 10 パーセントをささげて、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981 年からはじまりました。

発行：公益財団法人 PHD 協会
住所：〒650-0003 神戸市中央区山本通 4 丁目 2-12
山手タワーズ 601
TEL：078-414-7750 FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人 PHD 協会 01110-6-29688

- 特集 今井鎮雄先生 逝去 . . . P. 2-4
今井先生の言葉
お別れ会報告



提供：神戸新聞社

伊勢湾台風で被災した名古屋市内で救援活動をする今井鎮雄先生。
1959 年、今から 50 年以上も前の話。
この時に PHD 運動提唱者である岩村昇先生と出会った。

「今井鎮雄が伊勢湾台風で軒下まで水浸しの家々に
衣料品や食料品を配って歩いたの知り、
医師は病院で患者を待つのではなく、
患者の方に出向くのが役割だと感じた」

岩村先生は上記のように語り、
3 年後ネパールへ渡る。
今井先生と岩村先生の出会いから
PHD は生まれた…

特集 理事長 今井鎮雄先生 逝去



国際ロータリーの会合であいさつをする今井先生（神戸新聞社提供）

PHD 協会の設立から昨年までの 30 年以上の長きに渡り理事長を務めていただいた今井鎮雄先生が、2014 年 11 月 3 日に 93 歳でお亡くなりになりました。岩村先生の良き理解者として二人三脚で PHD 協会の活動を作り上げ、発展のためにご尽力いただきました。今井先生が居なければ PHD 協会は生まれることができなかったと言っても過言ではありません。

改めてご冥福をお祈りするとともに、今一度今井先生のお言葉を振り返りたいと思い、PHD 協会 20 周年記念事業での開会挨拶の一部を掲載させていただきます。
事務局長 坂西卓郎

2001 年 10 月 6 日 PHD 協会 20 周年記念事業開会挨拶より

世界が平和になるために、共に生きることを実践している人に感謝状を差し上げようと国際ロータリーが考えた時に、ネパールで活動されてきた岩村先生にということになりました。サンパウロでの授賞式の時に「世界の指導者同士のつながりだけではなく、草の根の人たちが心を通い合わせ、分かち合う生活をするのが大切で、それを実現していくためには、世界が平和でなくてはならない」と先生がおっしゃった。さらに先生は医者ですから、多くの方が苦しんでいるのを見て、健康が大切だということを感じました。それを実現するためには教育を充実させ、一人一人の人間性を開発していくことが大切。これを英語で並べて Peace, Health, そして Human Development、その頭文字をとった PHD という運動を始めたいと岩村先生が言われました。私はそのためにお金を集めますからやりましょうということになり、そして兵庫県下のいろんな方が応援し

てやろうと輪が広まっていったのでした。（中略）

この 20 年同じことを繰り返してきたのではありません。その時代の変化に合わせて、アジアの間として、対象地域の方々と相談しながらプログラムを進めてきました。PHD というものはひとつところに留まるものではなく、岩村先生のネパールでの奉仕から芽生えたことが、今、ネパールの人たち自身によってすすめられています。これから各地でもこういったことが広がってくると思いますが、これからの 20 年はどうしていくのか、私たちは次の段階を考えなければならない。岩村先生が考えた「他の人と一緒に生きること、生きることとは分かち合うこと」という精神をどのように続けていけるのか。これを考えることがこうして集まっていた目的です。それを 20 周年のお祝いにしようということなのです。



PHD 協会の理事会・評議員会にて



岩村先生と今井先生の対談（1987 年 2 月）
PHD LETTER 22 号より



今井先生と 2010 年度の研修生たち

「時代の変化に合わせた新しいことを」 今井 鎮雄

略歴

- 1920 年 11 月 東京に生まれる
- 26 年 旧満州・大連へ転居後中学を卒業
- 38 年 同志社大学予科入学
- 43 年 学徒出陣で海軍航空隊へ
- 46 年 同志社大学法学部を卒業
灘購買組合（現、生活協同組合コープこうべ）勤務
- 48 年 神戸 YMC A へ転じる
- 53 年 日本で初めての肢体不自由児キャンプを実施
- 59 年 伊勢湾台風での救援活動に参加
- 63 年 神戸 YMC A 総主事就任（21 年間勤める）
- 80 年 国際ロータリー第 2680 地区ガバナー就任
- 82 年 財団法人 PHD 協会理事長に就任
- 85 年 PHD 研修生をロータリー米山記念奨学生として支援開始
- 93 年 神戸新聞平和賞 受賞
- 95 年 国際ロータリー理事就任
- 2006 年 著書「時を刻む」出版
- 2014 年 11 月 3 日兵庫県神戸市で逝去 享年 93 歳

上記以外にも兵庫県教育委員、県・社会教育委員、顕栄短期大学学長、神戸シルバーカレッジ学長、啓明学院理事長、神戸市社会福祉協議会理事長、兵庫県青少年本部理事長、国際ロータリー第 2680 地区震災復興委員会委員長などを務め、神戸いのちの電話開設、ひょうご創生研究会発足など多方面で活躍。また兵庫県社会賞受賞（81 年）、神戸市文化賞受賞（83 年）、キリスト教功労者表彰（2000 年）、総務大臣表彰（07 年）、神戸市政功労者特別表彰追贈（14 年）など他多数を受賞する。

「今井先生の仕掛けと私たちへの宿題」

PHD 協会 元総主事代行 藤野達也

PHD を提唱したのは、言うまでもなく岩村先生。しかし、その仕掛け人は今井先生でした。岩村先生の 1962 年からのネパールでの医療活動の功績に対し、国際ロータリーから賞が贈られることになり、賞金の使い先として PHD の構想が、81 年 6 月の受賞講演のなかで発表されました。

59 年の伊勢湾台風の救援活動で知り合っていたおふたりでしたが、岩村先生が 80 年に帰国後、神戸大学医学部教授に就任、当時神戸 YMC A 総主事であり、ロータリークラブの会員であった今井先生と相談を重ねました。

PHD の活動の表看板は岩村先生、それを支える運営面と組織づくりを今井先生が担いました。生まれたばかりの民間の組織ながら、兵庫県、神戸市をはじめ各方面から多大な協力が得られ、長く続けられるようになったのは、今井先生の幅広い人脈があったからこそです。任意団体として動き出した PHD 協会は 82 年に法人化され、今井先生が理事長となりました。

私は 20 代半ばだった 81 年秋にボランティアの一員として加わり、82 年から 30 年間職員としてお世話になりました。特に震災以降は今井先生と直接やりとりをする機会が増え、神戸 YMC A にあったお部屋だけでなく、お忙しい先生を各地の会合、講演先まで追いかけてきました。ご高齢にもかかわらず、精力的に日程をこなされる気力、体力にいつも圧倒されていました。仕事面では事細かな指示はなく、いつも「よく考えろ」と言われ、なかなか期待にそえなかったことを思い出します。いま、私は海外各地の村を巡り、村の人たちのお手伝いをしながら生活をしています。先生にもよるこんでいただけるような成果があがったら、その様子を報告して、かつての埋め合わせにと考えていたのですが、間に合わず、残念でなりません。

直接の報告はもうかきませんが、今井先生の仕掛けに、接したみんながこれからもどう応えられるか。残された私たちへの宿題なのではと思います。

今井先生、ありがとうございました。そして、お疲れさまでした。ごゆっくり。



神戸 YMC A で子どもたちに講話をする
（神戸新聞社提供）



YMC A の仲間と（神戸新聞社提供）

理事長就任のご挨拶

水野雄二



昨年11月3日、PHD協会の理事長であった今井鎮雄先生が逝去されました。93歳でした。今井先生はPHD協会だけでなく、多彩で息の長い社会福祉活動を手がけられ、戦後の神戸の礎を築かれました。神戸YMCAの総主事として長く青少年の健全育成に努められたことがその原点としてありますが、他にも親と暮らせない子どもに里親を探す「愛の手運動」、全国初の肢体不自由児キャンプ、自殺を予防する「神戸いのちの電話」など、その業績は数え切れません。その基本姿勢には絶えず弱者への愛の視点があり、社会への貢献を実践する方でありました。その「実践」が時代に応じて形を変え、福祉、ボランティア、国際協力、教育、地域支援などの多彩な仕事となって結実す

るのです。その共通項を探せば、人に対する「愛」という言葉に集約されるのではないかと思います。

岩村昇先生が提唱されたPHD運動に関しても、今井先生がロータリークラブを中心に支援を呼びかけられて、PHD協会という法人としての体制が整い、運動を強化できて今日に至っていますが、今井先生の愛の姿勢が支えしようとする多くの人の心を、体を動かしたのではないかと思います。

今井先生は常に新しい時代を見据えつつ、人間が人間であること、人と人が共に生きることを教えられました。教えられた多くのことを次代に継承する責任を感じるものです。

この度、今井先生のご逝去の後、私がPHD協会の理事長に就任し、その後継をさせていただくことになりました。今井先生と比べるべくもない者ですが、よろしくご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

私は1978年に神戸YMCAに入職し、その当時、神戸YMCA総主事を務めておられたのが今井先生でした。また個人的にも私の父が今井先生のYMCA仲間であり、私を神戸に呼んでくだ

さったのも今井先生で、その意味でも、今日の私があるのも今井先生のお蔭だと申し上げるべきかと思えます。爾来、私は今井先生から息子のように接していただきました。特に、私が2002年に神戸YMCA総主事に就任し、その責任を担ってからは、今井先生の適切なアドバイスやサポートを受けて、その責務を果たして行くことができたと思っています。同じ2002年から、私はPHD協会の評議員として今井理事長のPHD協会に参与させていただき、その活動の一端を承知するだけの者でありました。

この度、私がPHD協会理事長として後継することになったことを今井先生はどのように思っておられるでしょうか。今となっては何うことは叶いませんが、良しと思っただけならば幸いです。今井先生の愛の実践を継承していくためにも、皆様の更なるご支援が欠かせません。皆様のご支援の下、私も微力ながら最善を尽くしたいと思っています。アジアの国々で、アジアの人々と、岩村先生が提唱された平和で、健康で、豊かな世界が少しでも広がりますように。

「今井鎮雄先生お別れ会」報告

事務局長 坂西卓郎

2月8日、今井先生を偲ぶ「今井鎮雄先生お別れ会」(発起人代表・武田建関西学院大名誉教授)が神戸のポートピアホテルで開かれました。当日は約1,100名が参列し、献花をささげ、今井先生との別れを惜しまました。

会では井戸敏三兵庫県知事をはじめ、今井先生を慕う方々がお別れの言葉を述べられました。印象的だったのは「常に先のことを考えていた」、「法律や制度にない新しいことをやらないといけない」、「いつも時代の流れをいち早く予見していた」など、道なきところに道を作る精神について感銘を受けたと口々に言われていたことです。その象徴的な事としては、日本初の肢体不自由児キャンプの実施が挙げられるでしょう。まだ誰も手を差し伸べていないところには法律や制度もない。そんなところにこそ自分たちの役割がある、と教えられた思いです。

思えば私たち事務局にも「時代の変化に合わせて新しいことをやりなさい」と何度となく言われていました。今井先生のように革新的なことはできないかも知れませんが、先生の想いを継いでチャレンジし続ける活動を展開していきたいと思っています。



今井先生がこよなく愛された余島(神戸YMCAの野外活動センターがある)をイメージしてつくられた祭壇

PHD 活動紹介 11月～2月末

11月

- 1日 新事務所お披露目会
大阪経済大学 インターン3名受入②
- 5日 コープ茨木白川 レインボースクール(工藤・吉川・メラティ・ムク)
- 8日 ソディ例会(芳田・吉川)
- 15日 スタディーツアー合同説明会(井上)
- 20日 コープ高砂 レインボースクール(井上)
- 22日 コープ住吉ボランティア交流会 バザー(吉川)
- 25日 川西市立清和台中学校 交流会(井上・吉川・サントウンウー)
龍谷大学 ワークショップ(芳田・工藤・ムク)、NGO 相談員(芳田)
滋賀市立打出中学校 交流会(坂西・メラティ)
PHD 協会 評議員会
- 28日 タイ出張(芳田・吉川) ～12/7
- 29日 ミャンマー活動家、ミンコーニン氏講演会(坂西・井上)

- 親和女子大学 講義(坂西・工藤・研修生3名)
- 10日 草地賢一さん昇天15年記念会(坂西)
- 21日 生協総合研究所 アジア生協協力基金プレゼンテーション(坂西)
- 26日 羽曳野市立西浦小学校 交流会(坂西・メラティ)
- 28日 兵庫県立国際高校 講義(今里・吉川・工藤・ムク・メラティ)
- 29日 関西 NGO 協議会 榎木事務局長来訪(坂西・工藤)
- 30日 関西学院高等部 礼拝・講義(井上・今里・吉川)
- 31日 ソディ例会(芳田・吉川)

12月

- 2-3日
- 3日 外務省 NGO 会議(坂西)
- 8日 神戸キワニスクラブ社会貢献賞授賞式(坂西)
ユニセフ協会 評議員会(坂西)
- 9日 関西学院大学 ワークショップ(今里)
開発教育セミナー 会議(今里)
- 11日 JICA 関西 PCD 研修(坂西)
- 13日 PHD 協会 理事会(坂西・井上・工藤・吉川)
- 17日 兵庫有機農業研究会 設立総会(坂西)
田辺市立咲楽小学校 交流会(坂西・今里・研修生3名)
- 18日 田辺市立柳瀬保育園 交流会(坂西・今里・研修生3名)
高砂市立阿弥陀小学校 交流会(今里・研修生3名)
- 20日 ソロプチミスト神戸 例会(芳田)
ソディ例会・布のタグ付(芳田)
- 26日 ネパール出張(井上) ～12/31
ワンワールドフェスティバル for Youth ブース出展(吉川・サントウンウー)、NGO 相談員(坂西)、実行委員会(坂西・工藤)
- 27日 中野宗嗣さん宅 餅つき大会(坂西・工藤・研修生3名)

2月

- 4日 京都府立洛北高等学校 講義(坂西・メラティ・サントウンウー)
- 5日 兵庫県高等学校教育研究会家庭部会・後期研修会
相談員として(坂西・メラティ・ムク)
- 6日 但馬農業高校 講義(今里・吉川・研修生3名)
- 7-8日 ワンワールドフェスティバル ブース出展(芳田・工藤)
相談員(坂西・井上)
- 8日 今井鎮雄先生お別れ会(坂西)
- 9日 淡路市立北淡中学校 交流会(今里・芳田・工藤・吉川・研修生3名)
- 10日 南あわじ市立灘小学校 交流会(今里・芳田・工藤・吉川・研修生3名)
- 12日 NGO 人材育成研修第1回(井上・芳田)
日本キリスト教海外医療協会・大江総主事来訪(坂西)
- 14日 伊勢市生涯学習センター NGO 相談員(坂西・研修生3名)
- 15日 加東市連合婦人会 報告会(今里・芳田・研修生3名)
関西 NGO 大学 相談員として(坂西)
- 17日 PHD 協会 運営協力委員会・理事会
- 18日 神戸 NGO 協議会 例会(坂西)
兵庫県生活協同組合連合会 訪問(坂西・ムク・サントウンウー)
- 25日 PHD 協会 評議員会
- 26日 国際ソロプチミスト姫路西 チャリティーバザー(芳田)
支援金授与式(坂西・ムク・メラティ)
NGO 人材育成研修第2回(坂西・井上)
- 27日 NGO 人材育成研修第3回(坂西・今里・井上)
- 28日 国際ロータリー第2680地区 地区大会(坂西・井上・研修生3名)

1月

- 8日 のぞみ保育園 交流会(今里・工藤・吉川・研修生3名)

第18期 国内研修生

様々な気づき と これからの展望

水俣を訪れ、経済発展の陰でないがしるにされてきた人々の暮らしや被害の甚大さを知る。また、このような問題の構造は決して過去のものではなく、現在も様々な局面で見られるということに気付かされる。



西日本研修旅行 (11月)

日雇い労働者のまちを訪れ、日本の社会構造の問題を目の当たりにする。「私たちの村では、仕事なくてもみんなで助けます」という研修生たちの言葉に、物質的には豊かな日本社会の心の貧しさや無関心という側面に気付いた。



釜崎訪問 (12月)



JICA研修 (6-7月)

紛争国からの研修員と共に、参加型コミュニティ開発についての研修を受ける。インタビューの対象となる人の「考え」ではなく「事実」を聞き取る質問を組み立て、求めている真実に近づくというインタビュー手法を学ぶ。



西協指導者会 (6月)

各地域の指導者会に参加し、PHD協会が多くの方のご支援によって長年支えられてきたことを実感する。その他にも有機農業研修、交流会、教育機関での講義、各種催事等に同行した。



スタディツアー (7・8・9月)



研修担当 工藤 成美さん

国内研修生として過ごした一年間は流れるように過ぎ去り、気づけばそれぞれの道へと旅立つ季節が巡ってきた。研修先でお世話になった指導者の方々、交流会で温かく迎えてくださった方々、ボランティアの方々、そして様々な場面で大切な気づきをくれた研修生たちに、感謝の思いを伝えたい。

与えられた居場所がむしゃらに

先日大阪で行われたワン・ワールド・フェスティバルというイベントに参加した際、「PHDの工藤さんに話を聞きたい」と言ってくださった来場者の方がおられた。一年前、誰も知り合いのいない地で必死になってネットワークを求め、やっと得た居場所にしがみつき、なり振り構わずやってきた私にとって、自分の存在を認識し興味を持ってくださる方がおられるということには大変救われた。「私は一年間ここに存在していた!」ということ、何よりも自分自身で認めることができた瞬間だった。

PHD研修生の一員として

PHD協会ですぐに経験を活かし、これからはJICA帯広のスタッフとして地域から盛り上げる国際協力的一端を担うこととなった。村のために頑張る研修生たちに恥じぬよう、大地に足をつけ土に触れながら、本当の豊かさとは何かを見つめ追及していく人生を、今後も送っていきたい。一年間大変お世話になり、ありがとうございました。



啓発担当 吉川 美華さん

PHD協会と私の立ち位置

一言でいうならば、PHD協会は大変懐の深い団体である。どんな人でも受け入れ、どのような活動でも認容する柔軟性がある。その中で私たち国内研修生はそれぞれの求めるものを模索し、可能な限り挑戦し、自らに吸収させる1年を過ごしてきた。また、研修生たちと共に過ごし、同じものを見て、各々が思うところを語り合うことを何度も繰り返した。共感できる事も、違和感を残す事も、今までに持たなかった視点での発見も、全てが新鮮で興味深かった。そしてなにより、行動に移すことの大切さを学んだ。

向き合うことから逃げるな

一年間の活動を通して経験した、研修生たちの村のために頑張る姿、指導者の方々の真剣で自信に満ちた言動、訪問したアジアの村々のシンプルで温かい生き方、PHD職員のしなやかな状況判断能力は、正面から物事に向き合わず、矛盾の連鎖に苦しみ、出口を求めていた私に、「突き進むのは決断、止まるのは判断」だと教えてくれた。それにより、今後は地域と自分の関わり方を再認識し、世界につながる自分の生き方を、ここにある問題とともに考えていきたいと思う。春からは、日本語教員になるべく新しい道を選んだ私だが、心根にPHD理念を持ち、行動することは変わらない。最後に、出会った全ての方々への感謝の意を述べたい。ありがとうございました。

ネパール・ミャンマーの研修生たちの村を訪問。帰国した研修生の活動や、自給自足に基づいた穏やかな暮らしを体験する。また、次期研修生の選考ミーティングにも参加。来日が楽しみになると同時に、研修生たちの心の温かさに触れ、遠かった国がグッと近くなったように感じた。



ソディ例会 (11月)

毎年12月に実施されるタイへの草木染め手織り布製品の仕入れに参加。布製品の仕入れの他に、双方の一年間の活動報告、製造過程の見学、さらに村でのホームステイを通し、ソディと布とタイが繋がる経験をする。



タイ・手織り布の仕入れ (12月)

研修旅行中、昔ながらの景観を守るために活動している「山崎・谷戸の会」を訪問する。大量に生産することを追及するのではなく、地域の人をつなげ、次の世代に伝えるべきものを残していくという活動に深く共感した。



東日本研修旅行 (11月)

ボランティアグループのミーティング「ソディ^{注1}例会」。出発前の11月には、現地へ提案する試作品の確認、今年度の国内活動の成果内容、仕入れ予算、今後の予定等について話し合いを行った。

注1：ボランティアグループで、タイ・カレンの手織り布グループを応援している

研修旅行報告

東 日本研修旅行 (11月9日～20日)

- 愛知県
 - トヨタ自動車労働組合
 - アークス東海・想念寺
 - 星城中学校、小牧幼稚園
- 長野県
 - 日本キリスト教団松本教会
 - 塩尻めぐみ幼稚園
 - 信濃むつみ高等学校
- 山梨県
 - 山梨英和中学校、山梨 YMCA
- 東京都
 - ロータリー米山記念奨学会
 - 全日本自動車産業労働組合総連合会
 - アークス仏教国際ネットワーク・勝楽寺
 - 日本労働組合総連合会
 - 外務省民間援助支援室、生協総合研究所
 - 桜美林大学
- 神奈川県
 - 地球の木、山崎・谷戸の会
 - こどもの広場もみの木クラブ
- 岐阜県
 - 日本キリスト教団中濃教会
 - 国際ソロプチミストかかみ野
- 静岡県
 - 東海大学

西 日本研修旅行 (1月10日～24日)

- 鹿児島県
 - かごしま有機生産組合
 - だるま保育園、蕨島小学校
 - 出水スローカルチャースクール
- 熊本県
 - 水俣病センター相思社、ガイア水俣
 - エコネットみなまた、ほっとはうす
 - 熊本 YMCA、菊池恵楓園
- 福岡県
 - 祝町小学校、旭ヶ丘会館
 - アジアを考える会北九州
 - 藤松市民センター、到津の森公園

- 山口県
 - 梅光学院大学・高等学校・中学校
 - 岩国みなみワイズメンズクラブ
- 広島県
 - 平和学習、共生庵
 - 仁賀小学校、三良坂小学校、灰塚小学校
 - 灰塚コミュニティセンター交流会
- 岡山県
 - YMCA せとうち、学童保育うのクラブ、岡山御津キリスト教会



水俣にて公害学習



広島にて平和学習

日々是東奔西走

研修担当 今里拓哉

12月に研修生たちと共に和歌山県の山間部を訪問しました。ここはなんとPHD協会の元職員が二人、元国内研修生が一人の計三人のPHD卒業生(?)が移住した地域です。今回は、元国内研修生の松平(上田)浩代さんと、PHDレター123号「PHD経由の人 vol.1」に寄稿してくれた元啓発担当職員の福井(佐藤)栄利子さんのお宅を訪ねてさせていただきました。

農家に嫁いだ国内研修生

浩代さんは周囲の山を展望できる見晴らしのいい山間に建つステキなお家に、パー



浩代さんが元国内研修生。

研修生たちへの伝え方を心得ています。

トナーと娘の3人暮らし。薪ストーブで温められた室内で、画用紙に写真と手書き説明を記した手作りの紙芝居を用いて一年の農作業の様子をお話してくれました。春にはワラビやワサビなどの山菜を採取。夏にはブルーベリー狩りを開催し、多くの方に農業体験の機会を提供しています。

PHDを経て山暮らし

その後、栄利子さん宅を訪れたのは日が沈んでから。街灯のない山道を抜け、車幅とほぼ同じ幅の石橋を渡り、やっとの思いで到着。そこは木と土壁に包まれた、都会の家にはない温もりを持つお家でした。パートナーは炭焼き職人。後から聞くとその家はお二人自ら建て、土壁も栄利子さんが仕上げたとのこと。ついでに車が渡った石橋もパートナーの自作。浩代さんご家族も合流し、スパイスを調合して作ったカレーと一緒に夕食としていただき、遅くまで団らんさせてもらいました。

温もりの

この原稿を書くにあたって振り返ってみても、心に残る訪問でした。和歌山とはいえ、



プラスチック製品がほぼゼロの室内

12月の山奥なので気温としては寒いわけですが、独特の心地良い温もり。この温もりの元は何なのか。薪や炭の温かさもありますが、「手作り」が持つ温もりなのではないかと感じました。紙芝居から農業まで、炭焼きから家作りまで、とにかくお二人の生活には手作りが溢れています。かたや私の生活には、大量生産された既製品がほとんど。

今の私同様、お二人はかつて神戸に事務所を置くPHDに毎日通っていました。自分とほぼ同様の環境下にいた人たちがPHDを経て、そのライフスタイルを見直し、それを変えたことに強い感銘を受けると同時に、「いずれは自分も」という希望を抱くことができました。さて、まずは引越しに伴いできた小さな庭に野菜植えようかな…。

ロータリークラブが生み、育てて下さった PHD 協会

ロータリー米山記念奨学会

昨年5月から2015年3月までお世話クラブとして明石北、加古川、篠山ロータリークラブの皆さまに受入れていただきました。

サントウンウーさんは例会以外の交流会にも参加させていただきました。「いつも笑顔で歓迎してくれる事がとてもうれしかった」と教育に携わるサントウンウーさんはロータリアンの方々から人間性について勉強させて頂いたようです。

メラティさんは「イスラム教徒の私に対していつも心のこもった配慮をしてくれた」と感謝していました。また、虫歯の問題に取り組むメラティさんはカウンセラーの方が歯科の先生という事で病院も見学させていただきました。

ムクさんは洪水被害を受けた近隣地域への支援等を行う篠山ロータリークラブの活動を知りました。「自分の事だけでなく、大変な国や地域に協力している事に感銘を受けた」と、自分自身がこれから活動する原動力になったようです。

今年は神戸ローターアクトクラブのご好意で2月3日に生田神社で節分祭を経験させていただきました。一年間大変お世話になり、ありがとうございました。(井上理子)



最後の例会にて岡田会長、兼古カウンセラーと



地区大会にて保地カウンセラーと



ムクさんの送別会にて

ネパール「くらしの拠点」づくりプロジェクト ～生協店舗がコミュニティの核になることを目指して～ 井上理子

本プロジェクトはアジア生協協力基金を受け、日本で生活協同組合の研修を受けた元研修生が核となり、生協の理念を普及しつつ「くらしの拠点づくり」を行うというものである。ネパール・ピンタリ村のプレムさん(13年度)は農業協同組合のリーダーで、現地にはSAGUNという信頼できるNGOがある。よってピンタリ村で「くらしの拠点づくり」を進めていくことにした。7月にコープこうべ職員の田中さんによる協同組合のレクチャーを行い、その後のモニタリングのため12月にピンタリ村を訪問した。

「マーケティング研修」

販売経路・方法を学ぶため、ネパール人講師を招き、マーケティングの研修をピンタリ村と周辺の村のキーパーソンを集め



研修参加者

て行った。具体的には現状把握と課題の明確化、マーケティングの概要についてのレクチャーを2泊3日で行い、17名が参加した。

「買い叩かれる」

課題として「生産した作物は買い手の都合によって買い叩かれてしまう」という意見がでた。プレムさんは「買い手ときちんとした契約をしてくれたら私たち農民は約束通りに生産する」と力説していた。販売先や経路が確保できれば、買い手の都合に振り回されずに済み、安定した収入と農作業へのモチベーションの維持につながるのではないだろうか。

「ピンタリ村の売り」

研修最終日、ピンタリ村出身のサノババさんという方から「ピンタリ村の作物は有機であることを売りにしていきたい」という意見がでた。サノババさんはプレムさんが有機で作ったカリフラワーの苗をもらい、自分でも有機で育ててみたところ、有機栽培が可能だと身を持って経験した。結果、有機



研修の様子

農業をやっていききたいという想いを持ったようで、プレムさんが撒いた有機農業の種は着実に芽をだしているように感じた。

今後は販売経路確立を目指し、現地NGOであるSAGUNのコーディネイトで成功地域へのスタディツアーを今回の研修参加者を対象に実施し、「くらしの拠点づくり」を進めていく。

<研修参加者の感想>

■ ラミンさん(ピンタリ村 35歳 女性)
とても勉強になった。生産性を上げ、安定させることで作物を安定的に売ることができるとわかった。販売先まで仲介人を介さずに売ることやブランド化ができたらいと感じた。また、村まで来て頂いたおかげで研修に参加しやすく感謝している。



ヘルマさん (07年度)

「生まれた赤ちゃん(次女)は女の子です」

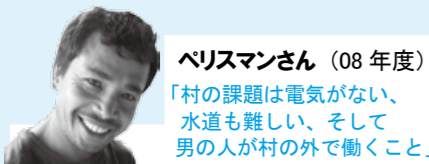
シランジャイ村の小学校で1年生を担当。現在は1-3年生までがシランジャイ村の小学校、4年生以上は隣のタベ村の小学校に通っている。6年生までが通えるよう村に新しい校舎を作って頑張りたいとのこと。当会が訪問したのは産休に入る直前だった。



ロザさん (09年度)

「12月に結婚しました」

現在はタベ村にある共同組合で週2日、主に会計補佐の仕事をしている。周辺の村からの候補者6人の中からインタビューを経て選ばれた。



ペリスマンさん (08年度)

「村の課題は電気がない、水道も難しい、そして男の人が村の外で働くこと」

村の課題解決に向けて考えていることは、村で現金収入を得るための仕事ができるようにすること。「まずは自分が養鶏(卵用)をして大工の出稼ぎにいかなくても良いようになれば、周りの人もそれを見て同じようにやってくれるかな」と思っている。鶏舎は資材を購入して自分で建て、鶏のエサには米ぬか、魚粉、タニシ、とうもろこしを使う予定。

シランジャイ村特集



シランジャイ村での活動と課題

■牛のグループ (政府のプロジェクト)
シランジャイ村に5グループある。メンバーは各グループ10人。各グループに牝牛2頭が与えられ、世話役を決め、人工授精をさせる(料金は各グループが負担)。子牛が生まれたら子牛はお世話役の人のものとなり、牝牛は次のお世話役に渡る。牝牛が子を産まなくなったら売って新しい母牛を購入してもよいというシステム。ペリスマンさんとロザさんもメンバー。

■道のプロジェクト (政府のプロジェクト)
全長545mの道をコンクリート製にする。道幅やコンクリートの厚みは適正かななどをチェックする仕事をペリスマンさんが担当。周辺の他の村でも道路のコンクリート化が行われている。

■有機農業グループ
ヘルマさん、ペリスマンさん、ロザさんの3家族が集まり、3回ほどのミーティングを経て2014年に誕生。代表はペリスマンさん、会計はヘルマさん、書記はロザさん。メンバーは10人。村の人は化学肥料や農薬を使っているため、自分たちは堆肥やボカシを作って使おうと思ったとのこと。目標は農薬を使わず、化学肥料は少しずつ減らしていき、牛糞と鶏糞を使った農業をし、共同で市場や近くの町に売りに行くこと。

■水道
2006年水道が各戸に繋がった。山からの水を各戸にパイプで配水。パイプは鉄製のものもあれば、プラスチック製のものもある。しかし、住民から水道代を集めていなかったため、メンテナンスするお金もなく、人もいなかった。パイプが破損してもそのまま放置されているところが多い。ロザさん宅ではパイプが破損したので自分たちで修理したが、ペリスマンさん宅では壊れたままの状態、家から徒歩15分程のところの井戸から飲み水を汲んできている。

タラタジャラン村



エリザさん (11年度)
一児の母に。忙しい毎日。保育園の先生はしばらくお休み。

インドネシア 帰国研修生短信



カユジャングイ村

ダリスマンさん(13年度)
研修指導者の泉さん宅で習ったアミノ酸を4月に仕込む。材料は魚の内臓・骨・黒砂糖。

来日前は、家の農業を手伝う程度だったが、帰国後初めて自分の畑で苗を植え、収穫、販売という一連の作業を自分で行ったことが嬉しかったよう。しかし植えた唐辛子は葉が小さく色が黄緑色になり、花の数も少なくなる病気が広がってしまった。



家の前にある保育園の先生。園児は14人。9月から町の大学に通い、幼児教育の勉強を始めた。「授業料が高いので、いつまで続けることができるかわからないけど、保育園のために頑張りたい」とのこと。

インドネシア：9月8日～19日
研修生の村を訪問！

安本真理子さん(神戸市) 再び

私がインドネシアのスタディツアーに参加するのは、2002年のツアーに続き、実は2回目。前回はミミさんが日本で研修中、ツアー中の選考にて次年度の研修生がエリさんに決まった年で、当時私は大学3年生だった。約10年の時を経て、国内研修生を経験し、インドネシアを再訪する機会に恵まれた。

思ったこといろいろ

家族の仲の良さ、子どもの伸び伸びしている姿を見て、母系社会^{注1}っていいなあと考えた。日本で、特に街だと子育てが孤独で大変そうなイメージがあるが、すぐ近くに母親や姉妹家族が住んでいるせいか、ここではみんなで子育てをしている感じ。ミミさん宅にいても、一番下の妹さんが子どもを連れて、夜やって来て話をしている。そのうち旦那さんも来る。カユジャングイ村を歩いていると、いつの間にか子どもがたくさんいる。経済的には大変なことも多いんだろうけれど、安心して子育てができる環境がある。日本の状況を考えて、制度うんぬんの問題もあるけれど、自然からどんどん離れて、本来の意味での「生きる」ということから離れてしまっており、子どもを産んで育てることさえ、なかなか難しいんだと思う。



ちょっと休憩、田植え途中の村のお母さんたち

行ってみて分かったことは他にもいろいろあった。国内研修生の時に、研修生からよく聞いた言葉、「日本では村でおじいさん、おばあさんが一人で農業をされていて寂しい」。頭では分かるのだが、日本での農業とはそんなもので、逆に大勢でやる農業というものに分からなかった。しかし今回、村を歩いている時に、農業グループのお母さんたちが田植えをしているのに遭遇し、休憩時間に私たちも一緒にお茶を頂くという好機に恵まれ、本来の農業ってこんな感じなんだと実感することができた。

インドネシアの村で日本の村を思い出す

私は昨年度、兵庫県養父市大屋町の農業指導者、上垣敏明さん宅にて約1年間の農業研修を経験した。インドネシア滞在中、研修生たちの暮らしを見せてもらう中で、意外なことだが日本の村の暮らしに似た感覚を思い出すことが多々あった。例えば、大屋町にはゴトンロヨン(共同作業)に近い、日役(ひやく)という村の地区ごとに行われる共同作業がある。鹿よけの電気柵の設置や水路の掃除だったり、慈善事業ではなく半ば義務的なものではあるが、助け合いの精神は残っているのだと思う。村の人も顔見知りであったり、親戚同士が近くに住んでいる環境がある。人付き合いが濃くて、逆にわずらわしい事もあるけれど、得られる安心感は何ものにも代えがたいものだった。さらに最近では都会から移住してくる若者もいる。私たちも研修生たちも「日本」とひとくりに言うけれど、日本の街と村では少し違うよと言いたくなった。日本の村にも、まだかろうじて希望があると思う。そして私も「将来的には、やはり田舎で自給自足を目指したい」との思いがますます強くなった。

私にとっての幸せとは

国内研修生修了時に、「幸せとは家族や気の合う友人たちと手作りのご飯を頂けることであり、まずモノやお金中心の生活を見直し、農的な暮らしを目指したい」と、一応私なりの答えを出した。今回の旅にて、この方向性は間違っていないかと実感す

ることができた。

一方、元国内研修生として日常生活ではまだ何もできていないという負い目がある。1年間の農業研修を終えたが、神戸の実家に戻ってきてからは家庭菜園が精いっぱい。理想の暮らしは描いてみるものの、踏み出すには経験や勇気がなく、会社員に戻るべきか否かと足踏み状態。研修生たちに自分の村で頑張ってもらいたいと思う一方で、自分はどうか。次に研修生たちに会うときには「これを頑張っています」と胸を張って言える自分でありたい。また、PHD協会のつながりの枠を超え、日本でも同じ価値観を持った人たちとのつながりを作り、自分の足場を築いていきたい。



日本のカレーを作らせてもらいました

これからもつながっていききたい

4月に来日する研修生のゾンさんが日本での研修を終えて帰国したら、アフリタさんやダリスマンさんが共に活動するカユジャングイ村はどのようになっていくだろうか。そんな先の先までが楽しみで仕方ない。これからもボランティアとして、また、元国内研修生としてつながっていききたい。



注1：研修生たちはミナンカバウという民族。結婚すると男性が女性の家で暮らす。そして土地や家屋などは娘たちが引き継いでいく。



ポディヤさん (06年度)

「今はね、農業とても楽しい。大好き」

有機農業に力をいれている。畑ではキャベツ、レタス、チンゲン菜、豆（赤と黒）の2種類、アーティチョーク、カボチャ、ピーナッツなどを作っている。全て農業は使わず、肥料には牛糞や鶏糞を使っている。作物はロイヤルプロジェクトのセンター^{注1}や学校の寮に売る。

また農業のグループに参加していて、月に1回程ミーティングをしたり、野菜の作り方、薬（自然のもの）の作り方などを勉強している。他にも少しずつグループにお金を入れて、必要な時に使うことができる共済のような仕組みもある。ただし使用目的は農業限定。



複数の野菜を栽培する混植を実践

注1：王族のプロジェクトを行っているセンター。有機農業をすすめている。薬を使わずに育てた農作物を慣行農法の作物よりも高い値段で買い取り、箱詰めし、ロイヤルプロジェクト印のシールを貼って国内外で販売している。栽培方法についても、混植や有機肥料、自然農業などの作り方を教えており、種も販売している。



チャーユさん (07年度)

「ごめんね。農業はあまりできていません。米と果物とコーヒーを少しだけ」

地域の保健活動のボランティア202人のリーダー。15家族を担当して定期的に訪問し、血圧、糖尿病についての話をしたり、妊婦のケアをしている。日々忙しく活動中。



スラチさんの田んぼ



スラチさん (02年度)

ムシキー

竹筒にもち米とココナッツミルクを入れて、火の側へ



ポディヤさんが買ってきたばかりの子豚



タイ 帰国研修生短信



ブンシーさん (00年度)

長男は小学校、次男は小学校併設の幼稚園に行くようになり、以前に比べて自分の時間をとれるようになった。その時間で布を織ったり、刺繍をしたりしている。今年当会が仕入れたコースターはブンシーさんの母が織りブンシーさんが刺繍をしたもの。

山の村で精米の仕事を継続。妻の体調が少し良くなったので、しばらく休んでいた米づくりができ、収穫は6,200kg。まだ1/3の田んぼを親戚や知人に任せている。妻の体調が万全になれば残りの田んぼや畑で作物を作りたい。以前畑では、にんにく、大豆、などを作っていた。妻と一緒にスイカを作ることができたらと思っている。長女・17歳、次女・12歳は毎晩1時間ほど塾のようなところで勉強をしている。「お金はかかるけど、勉強が好きだったらいい」と。また2人とも大学に行きたいようで、「高校で勉強がよくできるのであれば、私は仕事頑張ります」と頼もしい父。

メーサリアン



布を楽しみ、アジアに親しむ ソディのメンバーと国内研修生が、カレンのお母さんたちの村を訪問！

*ソディ：当会内にあるカレンの手織り布を応援するボランティアグループ

タイ北部・カレンの村へ、ソディのメンバーである岩切さんと安本さん、啓発担当の国内研修生吉川さんの3名と一緒に出かけました。カレンの村に6泊。手織り布をつくる2つのグループ、カレンの村の暮らしを五感を通して体験しました。3名が感じたことは？ (芳田弓生希)

優しい布と太陽のようなお母さんたちの笑顔

ムシキーやメーサリアンは、昔ながらの北タイの雰囲気の色濃くとどめており、土の道の中央で昼寝をする犬たち、ブーゲンビリアの木々、高床式の家、遠くまで広がる刈り取りの済んだ田んぼなど、村に入ると特有の安心感に包まれる。この自然と共に生きるということ大切にしている村々で生まれる草木染めの布（私たちソディが扱う布製品）はここで作られている。色鮮やかに織り上げられた民族衣装を身にまとった明るい笑顔のお母さんたちが、楽しみのために、少しばかりの収入のために、身近な草木や木の実を煮出し、真っ白な糸を入れ、染め上げていく。でき上がった糸は、パステルカラーの優しさを持つ空色だったり、朱というには儚い夕焼けの始まり色だったりする。

この自然の中でしか生まれない糸によって紡ぎだされた製品は、お母さんたちのアイデアと技術力で、いまだき風にもなる。集会所の真ん中に布製品をを広げ、それらができ上がった経緯や今取り組んでいる事、グループメンバーの近況、日本から持ち込んだ試作品のお披露目など話題は尽きることなく、お茶を飲みながら、お菓子をつまみながら、ゆっくりと時間が過ぎていく。タイの布をただ



布のグループとのミーティング

の商品として見ていた私が、笑顔のお母さんたち、村の草木や木の実、薪の匂いと繋がりが、ソディの布になった瞬間だった。

(国内研修生 吉川美華さん)

やっと会えた！

メーサリアンは皆さん大人しいというかシャイな印象。「行政から『草木染めが上手なグループ』との表彰を受けた事と、チェンマイや町での販売や染め・織りの技術講習を受けに18回出かけた事がこの1年で良かった事」とグループのリーダー・ヨーチャさんが嬉しそうな表情で話してくれた。

一方、ムシキーは元気で楽しいお母さんたち。まず圧倒されたのは、オーダー外のいろいろな商品。創意工夫が伝わってきて、こりや、私たちがもっと商品を仕入れられるようにがんばらんと！と、やる気を起こさせてもらった。

今回私たちがつくった試作品のカバン3種と型紙を持って行って見せた時のお母さんたちの食いつきの早さといったら！こちらの話を聴くよりも、型紙を紙に写し始め、カバンの模様まで描いてくれたり…。本当はカバンの他にもサンプルも持っていこうと決めていたが、忙しさにかまけて作るのをあきらめたため、持っていけなかった。でも、こんなめったにない機会、睡眠不足になっててもいいから、作ってあげれば良かった…。

ムシキーでは、実際に木の実を煮出して、糸を染めるのを実演してくれたり、織りを体験させてもらったりして、それはもう手作り大好きな者としてはワクワク、たまらないひと時だった。

一番良かったのは、ソディの活動をもっと頑張りたい、お母さんたちや物語がある布

のこともっと伝えたいというやる気が湧いて来たこと。正直布に関しては好きという気持ちはあるものの、ボランティアが当たり前になると、なかなか新しいことを始めようという気持ちが起こらず…。今回は同じソディメンバーの岩切さんと一緒にできたこともあり、「お母さんたちや布のこと、村の空気などをもっと発信したいね」と話ができたり、いい旅になった。相変わらず、ぼちぼちとマイペースでの活動になると思うけれど、それでも長く続けることになんらかの意味があると信じている。長く続ければ続けるほど、見えてくるものを楽しみに…。(ソディメンバー 安本真理子さん)



布を通して互いに刺激を

メーサリアン、ムシキーはこういうところだというのが足を運んでわかった。日本でのバザーの様子や他地域の商品などの写真を見る事がグループにとっては喜びにつながり、ソディのメンバーが作った試作品や型紙などの実物を持っていくこともグループの心を動かすことだと実感した。布を通じてお互いに刺激あっている。

ソディの活動や販売の際の反応などを、日本からタイムリーに伝えることができればいいのかもしれない。そして買付の時にどういことを伝えたいのか、ソディから伝えることを考えたい。(ソディメンバー 岩切幸子さん)

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

10月	39件	¥4,450,388
11月	105件	¥1,069,806
12月	328件	¥3,165,031
2015年1月	107件	¥1,141,540
603件		¥9,826,765

上記の通り多くの皆様より貴重なご浄財を賜りました。自動車総連、労働組合総連合会「愛のカンパ」をはじめ、皆様のご協力に心より感謝を申し上げます。

◆第39回神戸キワニス社会貢献賞を受賞しました！

12月3日同賞の授賞式があり、坂西が出席してきました。「福祉関連事業、国際交流、青少年活動分野から社会奉仕

を行っている個人、団体」ということで、明石市内で身体障がい者の方々の支援を行っている「ユーアイグループ」さんと当会が受賞しました。神戸キワニスクラブの皆様、ありがとうございます。

◆日本語復習ボランティア募集します

第33期研修生の日本語復習ボランティアを募集します。

時間：月～金曜は16時～18時、土曜は午前中
場所：PHD協会事務所

◆来日報告会のお知らせ

第33期研修生の来日報告会を開催します。研修生の村の紹介、日本で何を学びたいかなどを報告します。ぜひ、ご参加ください。

日時：6月6日（土）14時～16時
場所：県民会館 *日時と場所は予定です。

〇月×日のPHD協会

「あっ、しまった！」

職員 今里 西日本の道中、何度か杖を忘れる。ある時は親切にも次の訪問先に届けてくれた。感謝。というか、もう杖は要らない？快方、良かったね！

国内研修生 吉川 「あっ、しまった」、と思ってもすぐに「まあ、いっか」とポジティブ吉川。たまには「どうしよう」と反省すべきかと思う今日この頃。

国内研修生 工藤 2月、北海道で新居を決めて帰神。すると出発前に郵送したはずの書類が机の上に。宛名を書かずに出してしまった。ファイトだ工藤！

職員 芳田 ○×コーナーの原稿依頼忘れ。当会報内で一番人気と噂。その裏側は毎回締切ぎりぎりでの駆け込み入稿。火事場の馬鹿力が愛される秘訣？

職員 坂西 現実でもあるが、それより多いのは夢の中。講演が立て込む時期は、よく「日程を間違え、本当は昨日だった」と飛び起きる。強迫観念？

職員 井上 明石北RCでの送別会に出席。話が弾み、サントウンに「バスの時間大丈夫？」と聞かれ、慌てて確認も時既に遅し。楽しすぎました…。

以上、声がよく通る順

第33期研修生は、4月8日来日予定です



カンチ・マヤ・タマンさん
(ネパール・27歳・女性)

研修予定テーマ
有機農業、協同組合
住民組織化



サンティダエーさん
(ミャンマー・20歳・女性)

研修予定テーマ
保健衛生、有機農業
住民組織化



シャフルル（通称ゾン）さん
(インドネシア・36歳・男性)

研修予定テーマ
有機農業、保健衛生、
住民組織化

スタティツアーのご案内

帰った研修生に会い、学ぶ旅。

今年は久々にインドネシアツアーを開催。
研修生の頑張りを一緒に出かけませんか？
お問い合わせお待ちしております。

ミャンマー：8月20日～28日（予定）
インドネシア：9月上旬（9日間程度の予定）
タイ：12月23日～1月2日

皆さん、村に来てくださいね。
待ってます！



帰国した研修生の活動資金になります！

外貨コイン・使用済み切手 収集キャンペーン実施中！

2013年度に皆様からいただいた外貨コインと使用済み切手は約14万円になりました。ありがとうございます。

この14万円は、帰国した研修生たちの活動資金＝PHD基金として積み立てます。PHD基金の適用第一号として、ミャンマーでモーママさんたちが作った図書館にトイレを作ることが決定し、現在進行中です。



編集協力：桃骨、安本真理子